説教 『　信じて祈るならば　』

小河信一 牧師

マタイによる福音書 ２１章１８節～３２節

今、主イエスはエルサレムに入城され、十字架の丘に向かって歩んでおられます。

そのただ中にあるマタイ福音書21:18-32は、私たちが主イエス・キリストにつき従うかどうかということに集中しています。救い主である主イエスに、自分の罪……弱さや貧しさ……を告白し、自分もまた主と共に苦難の道を歩んで行くのです。それによって私たちは、父なる神とキリストによる罪の赦しにあずかり、よみがえりの希望をもって永遠の御国を目指していく者となります。

主の十字架の道は、キリストの先駆者たちによって、「正義の道」として言い表されてきました。洗礼者ヨハネもまた、その「義の道」を指し示しました（マタイ21:32また3:1-12）。

箴言8:20――

慈善の道をわたしは歩き

正義の道をわたしは進む。

ここで、「わたしはわたし（人間）である」と早合点してはなりません。ここで言う「わたし」は、神に由来する「知恵」です（箴言8:1）。その理解が正しいことは、パウロの証言「ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです」（コリントの信徒への手紙一 1:24）からも分かります。

私たちは、その神の知恵である「わたし」から、「正義の道」に入って来るように呼びかけられています。

神の知恵なるキリストが、「正義の道」の真ん中を歩んでおられます（参照：コリントの信徒への手紙 二 2:14）。私たちの目の前で、主が立ち止まって、一人ひとりを招いておられます。さあ、主の呼びかけに応え、路傍から勇み出て、その行進に加わろうではありませんか。

マタイ福音書21:18-32には、①「いちじくの木を呪う」、②「権威についての問答」、③「二人の息子のたとえ」という表題が付けられています。主イエスが、迷い出すことの多い私たちに向かって、繰り返し正しい信仰を説き明かされています。

今日、エルサレムの旧市街には、ヴィア・ドロローサ（悲しみの道）という巡礼路

があります。全長約１㎞で、第１留・ピラトの官邸から第１４留・聖墳墓教会へと至ります。その「留」は実際、英語で station「駅 / 停留所」と表示されています。

十字架の道の出来事をしのびつつ、この説教においては、「いちじくの木を呪う」、「権威についての問答」、「二人の息子のたとえ」の三つの留に立ち止まります。そこでの主題は、主イエスのみ跡に従う、逸(そ)れることなく主と共に「正義の道」の真ん中を歩み続けるということです。

その道には、四方から悪魔の誘惑が働いて、「正義の道をわたしは進む」というその「わたし」を、神・キリストから人間へとすり替える罠がひそんでいます。自分で先を急がずに、主イエスに導かれて進みましょう。

①「いちじくの木を呪う」

マタイ福音書21:20――

弟子たちはこれを見て驚き、「なぜ、たちまち枯れてしまったのですか」と言った。

主イエスが十字架につけられる時が迫っています。それにもかかわらず、祈りの家である神殿は荒れ果ててしまっています。民の信仰はいわば枯れた状態で、豊かな実りが期待できません。

過越祭の季節に、いちじくの木が実をつけていないのは、自然の理(ことわり)ですが、その道理を越えて、主イエスは「時が満ちた」今、民に教えるべきことを率直に述べられています。

ただちに悔い改めなければ、いちじくの木のようになる――それと同時に、裁き主であり慈愛の神であるイエス・キリストは、悔い改める者に対し「ふさわしい実を結ぶ」（マタイ21:43）という約束をなされています。

この第①留で、主イエスは、正しい信仰への手引きとして、「祈り」について教えてくださいました。

マタイ福音書21:22――

「信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる。」

いきなり山を海に飛び込ませるような祈りができるか、となると皆、困惑するでしょう。しかしながら、ここで、主イエスが述べられていることは意外に単純です。元の言葉の語順に従って説明します。

まず、ⅰ「あなたがたが求める」すべてのものは、と言われています。つまり、私たちには、何でも神に求めることが許されています。ここでは、神を信頼し神に寄りかかることが起点になっています。「わたし」が神のふところに飛び込むのです。

それなら何でも求めてよいのか、自分の欲望優先で、反社会的なことまでも……というところで、次にⅱ「祈りにおいて」が来ています。祈りは神との対話ですから、当然、自分の求めについて内省が生じますし、より大きな求めに出合って、先の求めを捨て去ることもあるでしょう。

そして、ⅲとして「信じて」というように、中心に信仰が据えられています。この信仰こそ、十字架と復活において主イエス・キリストが私たちに啓示されるものです。

最後に、ⅳ「あなたがたは与えられるであろう」という神からの一方的な約束で閉じられています。ここには、神の前に、受身になり切った者が享受する平安があります。災いも幸いも、神から来るという確かな信頼の上に、私たちの祈りの生活は置かれています。

以上、ⅰ～ⅳをまとめると、「（常に / 何でも）あなたがたは求める、祈りにおいて、信じて（信仰を通して）、あなたがたは与えられるであろう」となります。

②「権威についての問答」

マタイ福音書21:23-24――

> [23] イエスが神殿の境内に入って教えておられると、祭司長や民の長老たちが近寄って来て言った。「何の権威でこのようなことをしているのか。だれがその権威を与えたのか。」 [24] イエスはお答えになった。「では、わたしも一つ尋ねる。それに答えるなら、わたしも、何の権威でこのようなことをするのか、あなたたちに言おう。」

主イエスは、祭司長や長老たちから問題を投げかけられましたが、逆に、彼らに問い返しました。そのこと自体に、主イエスのもとにある「権威」が何であるか、指し示されています。

作家・精神科医のなだ いなだ氏は、『権威と権力』（岩波新書）において、「権威」と「権力」の違いを説明しています。

端的に言えば、「一般に権力は、人に言うことをきかせるときに使われるが、権威は、言うことをきく側の方が感じる原理だ」ということです。

今、祭司長や長老たちが主イエスを問いつめて、言い負かし、最後には自分たちの言うことをきかせようとしているのは明らかです。そこで、主イエスは、彼らが言うことをきく側に立つように導かれました。

究極的には、主イエス・キリストの権威こそが主題であるにもかかわらず、ここでは、「（洗礼者）ヨハネの洗礼はどこからのものだったか」（マタイ21:25）

と、先駆者の権威を取り上げているのは、意味深長です。

なぜなら、アブラハム、モーセ、ダビデ、エリヤ、そして、ヨハネは、弱く貧しい器でありながらも、神に仕えることによって、この世に神の権威を言い広めたからです（ペトロの手紙 一 3:22）。そうして、主イエスは父なる神の御心に添って、神の救いの計画が成就するよう、死に至るまで神に従順に仕えられました（フィリピの信徒への手紙2:8）。このように、主イエスはまことにへりくだることによって、神の「権威」を開示されたのです。

神の「権威」を知る人は、ひたすら神からの御言葉を傾聴します。人からの評価や人の持つ権力にわずらわされることがありません（比較参照：マタイ21:26「群衆が怖い」）。

問題は、「権威」とは何かの答えをもらうことではなく、主に向き合うことです。

マタイ福音書21:27――

そこで、彼らはイエスに、「分からない」と答えた。すると、イエスも言われた。「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、わたしも言うまい。」

「わたしも言うまい」――主イエスは、私たちが応答するのを待っておられます。私たちが、ヨハネの洗礼は、否、主イエス・キリストの聖霊による洗礼（マタイ3:11、ヨハネ3:5）は、「天からのものだ」と答えるのを待っておられます。

主イエスはこの第②留「神殿の境内」にたたずみ、人々が洗礼の恵みにあずかって、キリストの道を歩みはじめるよう呼びかけておられます。

③「二人の息子のたとえ」

大勢の群衆が、都の大路を歩むキリストを見るために集まっています。その中には、一度、主イエスの説教を聞いて主に従ったものの、途中で挫折してしまった人がいたかもしれません。

マタイ福音書21:28-30――

28 「ところで、あなたたちはどう思うか。ある人に息子が二人いたが、彼は兄のところへ行き、『子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい』と言った。29 兄は『いやです』と答えたが、後で考え直して出かけた。30 弟のところへも行って、同じことを言うと、弟は『お父さん、承知しました』と答えたが、出かけなかった。

兄と弟の分岐点は、「後で考え直す」かどうかにあります。

「後で」という言葉は、「後で一度」というのではなく、「後々まで、とこしえに」ということでしょう。では、今日もあしたも「考え直す」とは、一体どういう

ことでしょうか。

「考え直す」というと、そのために、どれだけ人間の知恵や能力があるか、あるいは、「考え直す」ようにどれだけ努力奮闘しなければならないか、が人の心に浮かぶかもしれません。しかしそれでは、自分に向き合ってはいるものの、神に向き合っていることにはなりません。

概して人間は、自我が強いものです。往往にして人と論議し、その後でますます自説を固めこそせよ、「考え直す」こと、わずかばかりです。

しかし、私たちは主イエス・キリストに出会ったとき、頑(かたく)なな者を「考え直す」ように方向転換させる神の御力によって打ちのめされました。そこで、「考え直す」とはより正確には、「心を入れかえさせられる」（＝悔い改める）ことだと分かりました。

私たち、罪人が、今日もあしたも「心を入れかえさせられる」ように、神は御子を世に遣わして、十字架と復活の御業を成し遂げてくださいました。私たちは、その救いの御業を、「徴税人や娼婦たち」のようにただ信じるのです。

今日、私たちは、第①、第②、第③の留に立つことが許されました。「正義の道をわたしは進む」という預言の成就として、主イエスが十字架の茨の道を歩んでおられます。

最後に、40年間、荒れ野を放浪し、神の道を行く困難と歓喜を知り尽くしたモーセの祈りを引用します。罪深い民と共に自分自身が「心を入れかえさせられる」ように、神にささげられた祈りです。

出エジプト記34:9　戒めの再授与――

（モーセは急いで地にひざまずき、ひれ伏して）言った。「主よ、もし御好意を示してくださいますならば、<u>主よ、わたしたちの中にあって</u>（<u>どうか</u>）<u>進んでください</u>。確かにかたくなな民ですが、わたしたちの罪と過ちを赦し、わたしたちをあなたの嗣業として受け入れてください。」